

アメリカのウォーターフロント開発 (サンフランシスコ・モンテレー)



ピア39



アメリカのウォーターフロント開発の動機の一つが、老朽化した港湾施設等を再開発し、都心に人を呼び戻そうというものですが、その例の一つがサンフランシスコのピア39とその周辺一帯の開発です。

サンフランシスコ港は、ゴールデンラッシュ時に物資の集散地として最も栄えた200年の歴史を持つ港です。しかし、その後、港湾機能がロングビーチやオークランドに移ったため、遊休化したピア（栈橋）や倉庫を再利用し、その歴史性を生かしつつ、商業的地域開発がなされました。今やサンフランシスコの観光名所の一つとなっています。

ピア39は、旧栈橋を利用したもので、その上にシーフードレストランやみやげ物屋、ブティックなど比較的小規模な店がぎっしりと並んでおり、大道芸人などもいて、まるで日本の縁日のような雰囲気が演出されています。夜、その中の一軒のレストランに入ってみたら、料理は大方のアメリカ料理と同じく大味でしたが、大きく開かれた窓ごしの闇の中に、イルミネーションをほどこしたベイブリッジやヨットの灯りが浮び、ムードは満点でした。

このピアは、その上の建造物、手すり、床に至るまで、全て木で造られています。このため、歩くとコツコツと音がして下が海であることが実感されます。また、コンクリートのような人を拒絶する冷たさがなく、皮膚感覚になじんだ暖か味が感じられ、水辺であることとあいまって、訪れる人をよりリラックスさせます。

ピア39の周辺の旧工場地やマリーナも一体的に整備されており、（整備といっても整然とした感じはなく、店の外まで品物や調理場がはみ出し、むしろ港町らしいわい雑さが感じられます。）人々がその界隈を回遊しながら楽しめるようになっています。



遊歩道とマリーナ

ガラレリー・スクエアなど、元のチョコレート工場や缶詰工場のレンガ造りの建物を生かし、内部をレストランやブティックに改造したものもあります。

なお、これらの開発は、設計の詳細についてまで、サンフランシスコ湾開発保全委員会（カルフォルニア州機関）がチェックしており、個々の施設を利用しない人も水辺に近づけるよう、水際に遊歩道を設けるなどの配慮がなされています。また、同委員会では、親水性を重視した水際での設計、デザインの研究も独自に行われています。

サンフランシスコから海岸沿いに200kmほど南に下ったところにモントレーという漁港として古い歴史を持ち、スタインベックの小説の舞台ともなった小さな街があります。

ここでは、古いピアや最盛期には数十件もあったという旧缶詰工場を再利用したウォーターフロント開発が行われ、これにより、街全体が観光の街として再生されています。

ピアの上にはやはりレストランやみやげ物屋が並んでいます。その中のイタリア料理店に入ってみました。が、つり船の出入りやかもめの飛び交う様など海のにぎわいを見ながら食事ができ、つい次の予定を忘れかけてしまうほど、ゆったりとした気持ちにさせられました。

ここもサンフランシスコと同様、マリーナが整備されており、旧缶詰工場はみやげ物屋の他、ホテル、水族館に再利用されています。他に歴史的建造物も多いこともあって、素朴な落ちついた街並となっています。

建設省住宅局住宅政策課

課長補佐 松田 紀子



缶詰工場を改造した海辺のホテル

